

「東京港発展のモニュメント“第一芝浦丸”」 東京港建設事務所 より抜粋

第一芝浦丸は、大正15年10月に横浜市神奈川区の浅野造船所「現日本鋼管（NKK）浅野ドック」で引き船として建造されました。総トン数37.74トン、長さ18.29m、幅4.27m、喫水1.83mの当時としては、船舶建造技術の粋を結集した高性能の蒸気船で「海のSL」ボンボン蒸気として、昭和33年まで石炭を燃料に活躍しました。石炭をたく火夫を含め乗組員は8人でした。

船体は黒が基調で、操舵室は白、機関室はネズミ色、都のマークが入った煙突が1本天に向かって突き出ています。この煙突には、黒の本体に白いヨコシマが一本入っており、第一芝浦丸の特徴となっています。

実は、第一芝浦丸には同年に建造された同型の姉妹船が他に二隻あり、三つ児姉妹と言えます。姉妹船は第二芝浦丸、第三芝浦丸の呼称がつき、煙突には、第二芝浦丸が二本の白い横しま、第三芝浦丸が三本の横しまをもち、煙突を見ただけで、船の見分けがつくようになっていました。2年遅れて昭和3年には第四芝浦丸と第五芝浦丸も同型船として同じ浅野造船所の手で建造されています。

しかし、第四、第五芝浦丸の2隻は、第一、第二、第三芝浦丸の3隻が昭和49年に第1線を引退したのに比べ、7年早い昭和42年に廃船になっています。

昭和20年4月、第一芝浦丸は海軍に徴用され、千葉県勝山の岩井袋で港をかこむ山すそに、海軍の特殊潜航艇を入れる穴掘り工事に従事しました。そして、昭和24年度頃から、豊洲、晴海等の整備に伴い前面浚渫や台場を崩した土砂運搬等も盛んになり、第一芝浦丸も活躍しました。昭和33年には、従来の石炭をたくボンボン蒸気船の燃料を重油に切り替える改造工事が行われました。その第1号は第一芝浦丸でした。

その後、昭和36年頃は大型バケット浚渫船天城号を中心に浚渫船団は全盛で、芝浦丸系列の船はジッパー式浚渫船香取、鹿島のもとで働く引き船として活躍しました。

しかし、42年から43年のかけ香取、鹿島等ジッパー式浚渫船の廃船に伴い、第四、第五芝浦丸の廃船を始め、他の芝浦丸系列の引き船もだんだん予備船的な扱いとなってきました。これには、人員が少なくなったのに加え、 m^3 当りの単価も高くて能率が悪いというマイナス評価もあったからです。

この様な経過を経て、昭和48年頃から第一、第二、第三芝浦丸は全面的に休航状態となり、昭和49年には遂に廃船が決定しました。